## 知彼知己



胆振西部医師会 豊浦町国民健康保険病院

秀毛寛己

外来の床や廊下にゲジゲジがいると、見つけた職 員や来訪者はパニックになり、ほうきで叩いて撃退 しようとする傾向がある。想定していない場所での 遭遇は特に気持ち悪さをあおるらしい。このような 時、無意味で無慈悲な行動を制止して、素手で保護 に乗り出すのを常としている。手のひらに乗せると じっとして逃げ出さないか、ゆっくり行ったり来た りしてリラックスしているようだ。「これは、益虫 と同じで害虫とかゴキブリとか食べてくれるいいや つだ。殺してはだめ」と教える。ゲジゲジのデザイ ンは秀逸で、動きのスムーズさにも惚れ惚れする。 咬んだり刺したりもせず危害は加えないのに、最大 限の不快感を持っての嫌われ者だ。同じく古代から のデザインを変えないダンゴ虫やワラジムシも土上 へ帰してやる。こちらもミミズ同様に土壌の耕作者 として役に立っているらしい。相似拡大すればナウ シカに出てくる王蟲みたいで非常にかっこいい。北 海道では秋になればあちこちにガムテープが置かれ カメムシを駆除している。昔、読んだシュヴァイツ アーの偉人伝で、病院ではすべての命を慈しみ虫も 窓を開け逃がすとあったのと、学生時代に少林寺の 合宿をさせてもらった山口の常栄寺・雪舟庭で、朝 の作務前の座禅時、「ここは寺だからけっして蚊を はたくな、殺生をしてはいけない」と坊さんに言わ れたのが意識にあり、カメムシも指先にとまらせ遊 んでから逃がしている。こちらが攻撃しないのでけ っして妙なにおいは出さないでいてくれる。病院に 虫の珍客と言えば、オニヤンマが入ったりすること がある。豪快な羽音と飛翔、ぶら下がるようなとま り方、その貫禄に圧倒されながらも羽を痛めないよ うに捕獲を楽しませてもらって空に放つ。

患者さんに対してもゲジゲジやダンゴ虫、ワラジムシと平等に、外傷であっても素手で接し、診療上、手袋は清潔手術時のみで触診、採血時にしたことはない。問題だと言われるかも分からないが、人さまに触れるのに手袋ごしでは失礼と思ってしまうのだ。そのかわり手洗いに関しては手術時のやり方で肘上まで不必要なくらい頻繁に行っているので、アライグマみたいだと言われてきた。また外科手術を除いてマスクをしたことは全くなかった。口元を隠すと診療の雰囲気が冷たくなる気がするのと、外すとき眼鏡もいっしょに取れて鬱陶しいからだ。病院の中で遭遇する生命体(虫とか人つまり患者さん)に対して以上のように自分なりの畏敬の念をこめて

マイルールを通してきたのだが、今年に入り新型コロナウイルス感染症対策で、自ら率先して不慣れなマスク着用と体温測定もするようになった。

治療も予防も確立していず、さらに種を超えての 感染や不顕性感染もあり得て、感染有無の診断に不 確実さが伴う。その上、長期化し終息に程遠そうで、 いろいろな不安でいっぱいである。このような未経 験で感知し辛い相手は人類にとり最強最大の災厄の 一つと思う。

何が一番強いか? 陸上動物ならシロクマ、海な らシャチ、昆虫ならカブトムシ…。だが見える相手 にはすべて弱点と手なずけ方がある。シロクマはそ の次に強そうなライオンやトラなどネコ科と違って 表情が乏しいのでサーカスの調教で一番危険らしい が。こんな議論を学生の時にある友人としている と、最強動物はカメだという。ライオンと闘っても 甲羅に引っ込んで100年じっとして首を出したとき には、相手はすでに死んでいる。カメは万年ってい うから100年なんて一瞬だからという。当時、笑っ て面白がっていたが、今回のコロナ禍でのおうちに 居ようとかいう巣ごもりキャンペーンはまさにこれ と同じ方式だ。全くの仮定だが、世界中の人が一斉 に約3週間、家でフリーズするような暮らしができ るなら、コロナの薬もワクチンも何もなくても取り 敢えずパンデミックは理論的には終息するはずであ る。今でもQuarantineの語源が示すことの実行が 唯一確実な対処法だが、そんなことは現実的に不可 能だ。

「山川異域 風月同天」。空間ばかりか千年の時間を超えても新興の病原体との戦いや、それにより社会に起きる諸問題についても歴史は繰り返している。カメの真似はできないにせよ、ある種の理性ある忍耐も学ばなければならないのかもと思いながら病院で空き時間にカミュの『ペスト』を読んでいる。